

離島実習（奄美大島・住用診療所）をおえて感想文

1日目は県立大島病院での実習でした。鹿児島大学の地域枠の先輩方に病院内を案内してもらいながら、各診療科の見学をさせてもらいました。研修医の方と直接お話させてもらい、わたしたちが研修するときのイメージがより具体的にでき、とても勉強になりました。

2日目は台風で診療所まで行けませんでした。3、4日目は住用診療所で研修させていただきました。外来見学しながら、血圧測定や、胃カメラの検査も経験させてもらい、実際に触ってみて初めて難しさを実感しました。その後、集落で捕獲されたハブを見せてもらったり、血管年齢や骨密度を測定させてもらったりしました。

住用診療所は奄美豪雨災害の時に1階がすべて水につかってしまった中で、患者さんのカルテのはいったノートパソコンだけをもって住用の方々を診ておられた先生がいて、そのお話を聞いた時には、離島医療に携わる先生の素晴らしさを改めて実感しました。また、外来に来る患者さんや往診が必要な患者さんと先生との関係は、患者と医師の関係以上に強い信頼関係が築かれていることを感じました。村の方々がとても先生を頼りにしていて、診療所全体で村の健康を守っていることを感じました。

先生の言葉の中で、「もらっているもの（治療や往診で払ってもらっている金額）以上の医療をしてあげたいという思いで患者さんと接している。」とおっしゃっていたのがとても印象的でした。大切なお話を聞いて、貴重な体験をさせてもらえたことに感謝しています。ありがとうございました。

俳句

守られる 町の健康 ここにあり

俳句の説明

先生は一人ひとりの病気だけでなく、その人の生活、家族や町全体の健康を考えられていて、また、町の人たちも病院をすごく頼りにしていると感じたのでこの俳句を詠ませてもらいました。

夏季離島実習感想文

今回は県立大島病院と住用診療所で実習を行なった。まず、県立大島病院では放射線科の研修医の先生に院内を案内していただいたり、CT画像診断やモニター映像を見ながらの縫合を体験させていただいたりした。実習をしていて最も印象に残ったのは、研修医の先生方がとても楽しそうに研修をしていることだ。お話を聞いている中で、もちろん研修医ならではの辛さや難しさがあることも感じられたが、研修医として勉強しながら経験を積んでいくことへの手ごたえが強く感じられた。これは県立大島病院が奄美の最後の砦的な役割を果たしている、患者さんの幅がとても広いことが一つの理由として考えられるが、それ以外にも奄美の風土や人柄などが関係しているのかもしれないと感じ、奄美の魅力を改めて感じた。次に、住用診療所では2日間の実習で外来、往診、老人ホームの訪問などをさせていただいた。特に外来では血圧測定や、ちょっとした胃カメラの操作などをさせていただいたが、血圧測定に関しては私が計測した値をそのままカルテに記入したので、かなり緊張した。野崎先生はいろいろな分野に興味関心を抱いていて、YOUTUBEの話や男女脳、走り方、スポーツなどの様々なお話を聞くことができた。お話の中で特に印象に残ったのは、往診の際に聞いた医療費に関するお話だ。高齢者の多い地域では特に往診の件数が多くなるが、往診は患者さんが払う額が大きい。高齢な方になると保険適用で1割負担なので患者さん自身が高さを指摘することはほとんどないが、往診に限らずすべての診療、治療、その他医療行為はよくよく考えたらもらっている額の大きさがとても大きい。故に私たちはもらっている額以上の質の医療を提供するように常に意識しなければならないとのことだった。これまでも、患者さんのことを思いやることの大切さのようなものは意識していたが、医療費のような具体的な数字を目の当たりにして、より強くその責任を感じた。また、実習内容とは少しずれるが、先生方とお話をする中で離島には心のケアが必要な方が思っていたよりも多くいらっしゃるということがわかった。自分は将来心のケアもできるようになりたいと考えていたので、改めてその思いが強まった。

最後に、今回の実習でお世話になった先生方、その他のスタッフの方々、患者さん、たくさんの方を学ぶことができた実習でした、ありがとうございました。

俳句

呼ばれたら すぐ駆けつける シマの医師

何か緊急事態が起こったらすぐ駆けつけられるようにしていて、地域の方々や診療所のスタッフからの信頼が厚いことが印象に残ったので、この俳句を詠みました。